

インドネシア語の他動詞形成接尾辞-kan, -i について

瀧川 加奈絵

(東南アジア課程 インドネシア語専攻)

キーワード：インドネシア語，他動詞，接尾辞，意味的機能

0. はじめに

0.1. 本稿の目的

インドネシア語には語形成の主要な手段として、接辞と重複が存在する。特に接辞はその種類も多く、例えば他動詞形成接尾辞には-kan, -iがある。これら二つの接尾辞は接する基語の特徴により、派生語の意味的機能が変化する。本稿では接尾辞-kan, -iが派生語に与える意味的機能の違いを観察し、その用法を体系的に記述する。本稿で用いるグロス、囲み線、網かけ、日本語訳、例文番号、及び外国語文献の日本語訳は、特に断りのない限り筆者によるものとする。

0.2. インドネシア語の語形成

Alieva et al.(1991)によればインドネシア語には多くの派生語があり、その語形成の手段は接辞法、重複、複合語であるという。本節では本稿に関係の深い接辞法についてまとめる。

接辞法とは語根に接辞を付加することで新たな語を形成する方法で、インドネシア語では非常に生産性の高い方法である。インドネシア語の接辞法は一つの接辞でも接する基語によって異なる機能を示すことや、動詞派生接辞が派生的でもあり屈折的でもあることなど独自の様式を持っているが、一般に膠着的である。

接辞には、接頭辞、接尾辞、共接辞¹、接中辞の4種類があるが、現代インドネシア語では接中辞は生産的ではなく、主に3種類が用いられる。表1に接辞の種類をまとめる。

表1: インドネシア語の文法的機能に関わる接辞

接頭辞			接尾辞	共接辞	
ber-	ter-	meN- ²	-kan	se-nya	ke-an
memper-	pe-	peN-	-i	ber-an	ber-kan
se-	ke-		-an	per-an	peN-an

(降幡(私信)をもとに筆者作成)

¹ 本稿で言及する共接辞とは confix のことであり、一つの基語に接頭辞、接中辞、接尾辞が同時に用いられることで一つの語形成を行う現象をさす。インドネシア語では接頭辞と接尾辞が一つの基語に同時に接するタイプの共接辞が存在する。

² N は鼻音交替を表す。接頭辞 meN-の場合、接する基語の語頭音により、mem-, men-, meny-, meng-の形をとる。

1. 先行研究

卒業論文では接尾辞-kan, -i の機能について記述した先行研究として、Chaer(1994)、Alieva et al.(1991)、Peterson(2007)、Shiohara(2012)を取り上げた。本稿では紙幅の都合上、Chaer(1994)、Alieva et al.(1991)における接尾辞-kan, -i に関する記述の比較、および接尾辞-kan, -i の用法の一つである applicative について Peterson(2007)の記述をまとめる。

1.1. 文法書における接尾辞-kan, -i の記述

本節ではインドネシア語の文法全般について記述した文法書である Chaer(1994)、Alieva et al.(1991)での記述をまとめ、比較する。両研究では接尾辞-kan, -i の文法的機能は他動詞の形成であるとしている。一方で接尾辞-kan, -i の意味的機能については類似する点が見られるものの、若干のずれが観察された。これを表2にまとめる。

表2: 意味的機能の記述の比較

接尾辞	意味的機能	Chaer(1994)	Alieva et al.(1991)
-kan	(基語の表す状態) にさせる	○	○
	(基語の場所に) 存在するようにする	○	○
	(基語) に持って入る	○	
	causative		○
	instrumental		○
	benefactive	○	○
	対象を～に変える		○
	(基語) になる、とみなす		○
	(基語で表す) ある行為を述べる		○
-i	動作の反復性	○	○
	前置詞的(prepositional)	○	○
	ある人物に (基語で表す) 感情を感じる	○	
	(基語で表す) あるものを加える	○	○
	(基語で表す) あるものを取る		○
	(基語で表す) にする、とみなす	○	
	(基語で表す) ある状態にする	○	
	causative		○
	locative		○

(Chaer (1994)、Alieva et al. (1991)をもとに筆者作成)

1.2. Peterson(2007)

Peterson(2007)は applicative 構造について以下のように述べている。

applicative 構造とは複数の言語に見られる手段で、周辺の項や補語をコード付けすることで中心的対象とする節の組み立て方である。機能としては、prepositional, indirective, benefactive, instrumental があり、基本的に意味的機能によって形態が変化することはなく、周辺項との関係において変化し、他動詞を形成する。

(Peterson 2007: 1)

Peterson(2007)で挙げられていたインドネシア語の applicative 構造の例³を引用する。

例文(1) a.は、動詞 mem-bawa 「持って行く」 が行為により移動を伴う surat 「手紙」を対象としており、行為の受け手である Ali 「アリ(人名)」は前置詞 kepada 「に、へ」を伴って表されている。一方例文(1) b.では、接尾辞-kan が後接されることで、行為の受け手である Ali が他動詞の対象となっている。これは典型的な benefactive の例であるとしている。

(1) a. Saya mem-bawa surat itu kepada Ali.
I TRANS-bring letter the to Ali
'I brought the letter to Ali.'

b. Saya mem-bawa-kan Ali surat itu.
I TRANS-bring-BEN APP Ali letter the
'I brought Ali the letter.'

(Peterson 2007: 47)

2. 調査概要

2.1. 調査目的

本調査では基語と接尾辞-kan, -i の後接で派生した他動詞の意味的機能について、先行研究で見られた相違点に注意しつつ、接尾辞-kan, -i の意味的機能を体系的に記述することを目的とする。筆者は接尾辞-kan, -i が後接した他動詞の持つ意味的機能が、その基語と関係性があると仮定している。

2.2. 調査方法

佐々木編(2008)『最新インドネシア語小辞典 第1.3版』は基語13,004語、派生語9,928語、計22,932語を収録した辞書である。同辞書に見出し語として掲載されている語の内、接尾辞-kan, -i が後接した他動詞、その基語および対応する自動詞を手作業で抽出する。

2.3. 集計および分析方法

調査の結果、接尾辞-kan が後接した他動詞は1,284例（うち例文が掲載されていたものは503例）、接尾辞-i が後接した他動詞は472例（うち例文が掲載されていたものは158例）が得られた。本調査では日本語での語義のみから判断することによる誤った分析を避ける

³ Peterson (2007)の例文中のグロスはすべて同書に掲載されたものを採用する。applicative の機能のグロスは Shiohara (2012) とは異なっている。

ため、例文を伴い記されていた語（接尾辞-kan 503 例、接尾辞-i 158 例）のみを分析の対象とする。抽出した他動詞、およびその例文を次の観点から分析する。

①基語の品詞

基語の品詞に関しては、Departemen Pendidikan Nasional Pusat Bahasa ed.(2008) *Kamus besar bahasa Indonesia Pusat Bahasa. Ed.4*（以後 *Kamus besar* と呼ぶ）⁴でそれぞれの見出し語に記載されている品詞を参照した。基語の品詞と抽出された他動詞の意味的機能の間に何らかの傾向がみられるかを観察する。

②対応する動詞形

インドネシア語では接尾辞-kan, -i が後接した他動詞に対応する動詞形として、接頭辞 meN-派生語、接頭辞 ber-派生語、接頭辞 ter-派生語、および基語単体が想定される。抽出された他動詞が対応する動詞形がいずれの形式であるか、またその語形成の形式によって派生語の意味的機能に傾向がみられるかを観察する。

③applicative の種類と対象の変化

Shiohara(2012)に述べられているような接尾辞-kan, -i の applicative の機能について観察する。特に掲載された例文内の他動詞の対象の変化に注目する。

3. 分析

Chaer(1994)で述べられていたように、接尾辞-kan, -i はどちらも異形態を持たず基語と接辞されていた。ただし接尾辞-i に関しては、基語の語末音が母音 i の音で終わるものが観察されず、同母音が連続することを避けるための制限があることが確認できた。

本節では 2.3.節で述べた観点をもとに分析した結果をまとめる。

3.1. 基語の品詞

Kamus besar を参照して同辞書の品詞分類に則って基語を分類した。各接尾辞の用例数は表 3 の通りである。

全ての品詞に共通して、接尾辞-kan, -i の主な意味的機能は「目的語を基語にする」であった。紙幅の都合上、本稿では各品詞において、意味的機能のバリエーションが見られた箇所を一部まとめた。

表 3: 基語の品詞に基づく分類

	接尾辞-kan	接尾辞-i
名詞類基語	147 例	60 例
形容詞類基語	130 例	27 例
動詞類基語	214 例	66 例
その他	12 例	5 例
合計	503 例	158 例

⁴ 同辞書は Pusat Bahasa（インドネシア語研究機関、現在の文化・小中教育省の前身）によりまとめられたインドネシア語-インドネシア語辞典で、国内でも最も権威ある辞書の一つである。なお使用した第 4 版は 90,000 語以上の見出し語を掲載している。

3.1.1. 名詞類基語

「目的語を基語にする」という主な意味的機能に加え、特に接尾辞-i についてはさらに細かく次の3つの意味的機能が観察された。

表 4: 名詞類基語+接尾辞-i の意味的機能

意味的機能	「目的語に基語を与える」	「目的語の基語になる」	「目的語を基語とみなす」
基語の特徴	主語によって増減などの操作が可能な具体物	人の職業や地位を表す名詞	個人的感情の対象となる名詞
基語	>jembatan 「橋」	>juara 「チャンピオン」	>musuh 「敵」
meN-kan, -i 他動詞	men-jembatan- <u>kan</u> 「橋をかける」 (佐々木編 2008: 124)	men-juara- <u>kan</u> 「(大会など)で優勝する」 (佐々木編 2008: 127)	me-musuh- <u>kan</u> 「敵視する」 (佐々木編 2008: 201)

さらにその他の意味的機能で得られた用例には、数としては少なかったが次のようなものが見られた。

- (i) 接尾辞-kan が場所を表す名詞に後接して「目的語が基語の場所にあるようにする」という意味を表す用例 (>rumah 「家」 me-rumah-kan 「家に入れる」)
- (ii) 接尾辞-kan が道具類、もしくは道具を伴う動作を表す名詞に後接して道具動詞 (instrumental verb) を表す用例 (基語例: ikat 「束、帯」、gelitik 「こちょこちょ」)
- (iii) 接尾辞-i が後接されて受取者動詞 (recipient verb) を表す用例 (基語は anugerah 「賜り物」のような何らかの授与を表し、受取者の存在が想定される語であった)
- (iv) 動作の反復性を表す用例 (>hujan menghujan 「雨あられと浴びせる」)

先行研究の Alieva et al.(1991)では他動詞基語に接尾辞-i が後接することで反復性を表すとされていた。本調査では、Kamus besar において名詞類とされる基語でもこの1例のみ観察できたが、その一方で動詞類基語からは例文付きで用例を得ることができなかった。

3.1.2. 形容詞類基語

特に感情を表す基語は文脈により、「目的語に基語の感情を抱く、抱かせる」という意味を表していた。接尾辞-i が「目的語に基語の感情を抱く」という意味を表すのに比べ、接尾辞-kan は表5で表すように、他動詞の表す意味に幅が見られた。さらに同じ基語でも文脈によっては形容詞的⁵に用いる用例が観察された。よって、接尾辞の種類は意味的機能を完全に線引きし分類できるものではなく、基語によっては文脈による判断が必要なものがあると考えられる。

⁵ 本稿で述べる形容詞的用法というのは、名詞句のなかで修飾語として機能する用法や、項をとらず他動詞的には用いられていない用法のこととする。

表 5: 感情を表す形容詞類基語+接尾辞-kan の意味の幅

意味的機能	「目的語に基語の感情を抱かせる」	意味は文脈判断	「目的語に基語の感情を抱く」	形容詞的用法
感情の主体	目的語	主語/ 目的語	主語	
感情の原因	主語	目的語/ 主語	目的語	
基語	>gembira 「嬉しい」	>sayang 「惜しい」	>bangga 「誇らしく思う」	>gembira 「嬉しい」
例文	(2)	(3)	(4), (5)	(6)

- (2) meng-gembira-**kan** orang tua (3) me-nyayang-**kan** Nyawa
meN-happy-KAN parents meN-pity-KAN Life
親を喜ばせる (佐々木編 2008: 91) 命を惜しむ (佐々木編 2008: 215)
- (4) mem-bangga-**kan** kedua orang tua (5) mem-bangga-**kan** anak-nya
meN-proud-KAN both parents meN-proud-KAN child-3SG
両親を喜ばせる (佐々木編 2008: 215) 子供を自慢する (佐々木編 2008: 215)
- (6) hasil yang meng-gembira-**kan**
result NMLZ meN-happy-KAN
喜ばしい成果 (佐々木編 2008: 91)

3.1.3. 動詞類基語

動詞類基語に関しては、名詞類、形容詞類と比較して基語単体では文中で用いることのできない拘束形態素が多く、動詞派生接辞が伴うことで基語が内在している意味が現れ、文中で用いることのできる形となる。そのため動詞類基語では、両接尾辞の本来の文法的機能である他動詞の形成を示す用例が多く観察された。

その他の意味的機能としては、接尾辞-kan の後接により授受的動詞(benefactive verb)や道具動詞(instrumental verb)が形成され、接尾辞-i の後接により場所的動詞(locative verb)や受取者動詞(recipient verb)が形成された用例が観察された。これらの例文は applicative の種類について述べた 3.3.節で挙げることとする。

また接尾辞-kan, もしくは-i が後接することで、本来自動詞+前置詞で表される意味と同等の表現となる前置詞的用法(prepositional)も観察された。

- (7) 接尾辞-kan の後接による前置詞的用法(>tanya 「尋ねる/ 問い」)
- a. ber-tanya (tentang) b. me-nanya-**kan** nomor telepon
ber-ask about meN-ask-KAN number telephone
尋ねる、質問する 電話番号を尋ねる (佐々木編 2008: 301)

3.1.4. その他

代名詞や数詞、助動詞を基語とした用例がそれぞれわずかながら得られた。これらを基語にした場合の意味的機能を一般化するには不十分な用例数であったため、卒業論文本体では例文を挙げ分析をするに留めた。本稿では紙幅の都合上割愛することとする。

3.2. 対応する動詞

接尾辞-kan, -i が後接した他動詞に対応する動詞として、接頭辞 meN-派生語、接頭辞 ber-派生語、接頭辞 ter-派生語、および基語自体が想定される。本調査で得られた用例がそれぞれの形式に当てはまるか分類したところ表 6 のようになった。

中でも meN-派生語には自動詞と他動詞のいずれかになる可能性があるため、二つは区別する必要があると考えられる。

meN-自動詞、ber-派生語、ter-派生語対 meN-kan, -i 他動詞は、自動詞対他動詞という関係が見られた。それぞれの派生語の自動詞としての性質は厳密には異なるが、meN-kan/-i 他動詞となることで、動詞の表す動作に関係する目的語を取る他動詞となると思われる。それ以外に色彩を表す基語を基にした語で、meN-kan, -i 他動詞では基語から連想される比喩的な意味を表す用例も観察された。

一方 meN-他動詞との対応については、接尾辞-kan/-i の後接に伴い、benefactive や locative といった applicative としての機能や、自動詞+前置詞の意味を表しうる前置詞的機能 (prepositional)、動詞の表す動作の意味を限定化、特殊化するなど、元の meN-他動詞とは異なる意味的機能を与えている点で、意味の違いという関係がみられた。

3.3. applicative の種類と対象の変化

今回の調査では Shiohara(2012)で言及されていたすべての機能について確認することができたが、得られた用例数は少なく十分な数ではなかった。使役的用法(causative)に比較すると用例数も少なく、applicative の機能を示す語は使役的機能よりも新たなものが生まれにくい傾向があるのではないかと考える。さらに本来授受的動詞として機能する語でも、動作の恩恵を受ける人を「～のために」という前置詞を伴い表す用例も観察され、applicative の機能を示す語が減少傾向にある可能性が考えられる。授受的動詞について「損失」という本来の恩恵と逆の内容を表す例も観察された。表 7 には用例数とともに基語を示す。

- (8) >ambil meng-ambil-kan 「取ってやる、取って来てやる」
 Mau ku-ambil-kan jaket untuk-mu?
 want 1SG-ambil-KAN jacket for-1SG
 ジャンパーを取ってきてあげようか。 (佐々木編 2008: 10)

表 6: meN-kan/-i 他動詞に対応する動詞

	meN-kan 他動詞	meN-i 他動詞	合計
meN-派生語	178	44	222
ber-派生語	64	22	86
ter-派生語	17	2	19
基語	244	90	334

表 7: 接尾辞-kan, -i の applicative の機能

接尾辞	applicative の種類	用例数	基語の例 (一部のみ掲載)
-kan	benefactive	8	beli 「購入して手に入れる」, rugi 「損、損をする」
	instrumental	16	bidik 「標的に方向を合わせる」, lempar 「遠くに放る」
-i	locative	6	jatuh 「落ちる」, tanam 「植える」, tulis 「と書いている」
	recipient	4	ajar 「教え」, anugerah 「賜り物、賞」, pinjam 「借りる」

4. まとめと今後の課題

今回の調査では、辞書による調査から meN-kan, -i 他動詞の意味的機能の違いと基語との関係について、その傾向を導くことができた。この関係ははっきりと線引きすることができるものではなく、中間的なグレーゾーンも存在するものであることが確認された。

調査資料を辞書としたため、掲載された日本語の語義のみに頼った誤った判断を防ぐために例文が掲載された語のみを分析対象とした。その結果例文掲載がないために分析対象とできなかった語が多く残った。これらの語についても用例を収集し、meN-kan, -i 他動詞の意味的機能の違いと基語の関係の境界線をより明らかにすることを今後の課題とする。

調査を通じ、接尾辞-kan, -i のそれぞれの生産性の度合いに差があることも観察された。今回の調査のなかで大まかな傾向は把握できたが、実際にインドネシア語の語彙の中で比較的新しい語や外来語に対してそれぞれの接尾辞が対応可能なのか、また、どのような意味的機能をもった他動詞を形成するのも今後調査していきたい。

略語一覧

- 形態素境界/ 1 1 人称/ 3 3 人称/ APP applicative 標示/ BEN 授受的/ NMLZ 名詞化/ SG 単数/ TRANS 他動詞化

参考文献

Alieva, N. F., V. D. Arakin., A. K. Ogloblin., dan Yu. H. Sirk. (1991) *Bahasa Indonesia: Deskripsi dan Teori*.

Yogyakarta: Penerbitan Kanisius.

Chaer, Abdul. (1994) *Tata bahasa praktis bahasa Indonesia*. Jakarta: Penerbit Bhratara.

Peterson, David A. (2007) *Applicative constructions*. Oxford: Oxford University Press.

Shiohara, Asako. (2012) Applicatives in Standard Indonesian. *Senri Ethnological Studies* 77: 59-76.

Sneddon, James Neil. (1996) *Indonesian reference grammar*. St. Leonards, Australia :Allen & Unwin.

佐々木重次 (1982) 「インドネシア語における態の問題」 寺村秀夫他編『外国語との対照 I』(講座日本語学・10) 東京: 明治書院. 292-304.

調査資料

佐々木重次編 (2008) 『最新インドネシア語小辞典 第 1.3 版』鳩山町(埼玉県): Grup sanggar.

Indonesia. Departemen Pendidikan Nasional Pusat Bahasa. (2008) *Kamus besar bahasa Indonesia Pusat Bahasa*.

Ed.4. Jakarta: Gramedia Pustaka Utama.